

# グリム兄弟の „Kinder- und Hausmärchen“

## における援助者について — 1 —

今 田 淳

マックス・リュティ (Max Lüthi) はその著『ヨーロッパの民話』(Das europäische Volksmärchen)の中で、「Märchen (この単語をマックス・リュティはここでは Volksmärchen の意味で用いている) は幼稚な人のための文学ではありえようが、そういう人の手による文学ではありえない。程度の高い芸術家が純粋な文学として創作し、それが民衆のものになったのだと思われる」と述べ、その起源についても、当面どちらとは断定できないとしながらも多少後者に力点をおきつつ、「民衆が与えられた物語を磨きあげて、自分たちの内的な欲求にも口承という伝達方式にも適ようにするか、あるいは物語がはじめからその欲求にも物語る能力にも相応しい形で民衆に与えられる」ことの二つを考えられる可能性として挙げている。誰によって創られ、どのような形で民衆に与えられたものであれ、今日我々が Volksmärchen とよんでいるものは、その言葉が意味しているように民衆の童話、即ち民話であり、民衆によって永い間語り継がれてきた口承文芸である。その内容は、それが民話本来の内容として相応しいものか、あるいはマックス・リュティがいうように「その基本形式に必ずしも相応しくない要素がみられる」かは別にして、信心深さを求め教訓を旨とするもの、果たせぬ夢を語るもの、奇想天外な冒険譚から、聖者ペートルスを誑かし、悪魔を虚仮にするものにいたるまで実に種々様々であるが、その内容の多種多様さに口承文芸であるという特殊性が相俟って、民話はいわゆる文学作品にはみられない数々の特徴をそなえている。時、所、人物が不特定であるということにはじまり、写実的な文芸、読まれる文学でならば饒舌、稚拙として非難されるにちがいない《同じ言葉による繰返し》も、聞き手にとっては、聞き損なったら《読返し》がきかない、《語られる》という伝達方法から生じた民話固有の性質であり、同じ場面には同じ言葉で繰り返すことによって、民話の正統な聞き手である子供の頭の中に結ばれるイメージを鮮明にし、且つ聞き手と語り手とを一体感でつつむ働きもあって、常に民話の生命ともなっているし、王子と継母にいじめられている可哀そうな娘、

《愚か者》の百姓の三男坊と王女、非常なお金持とその日に食べるパンもないという貧乏人といった登場人物や、成功すれば王子、王女と結婚できるが、失敗すれば首を刎ねられるという報賞と罰などにみられる極端な対照も、民話が口承文芸であるというところに起因している特徴であろう。これらの特徴を含めてマックス・リュティは民話が有する様々な特徴について詳しく論じているが、「主人公が本質的に放浪者であり」、その放浪者たる主人公を助けて成功に導く援助者の存在も民話には欠かせない特徴であるといえよう。民話では様々な、実に多くの理由で主人公は旅に出る。両親の困窮、主人公自身の貧困、父親の命令、継母の悪意、相棒の嫉妬、主人公の冒険欲、王様から与えられた課題、求婚の競争などが、主人公を孤立させ旅人にしたてあげる。そうして放浪者になった主人公が難題に向かうかあるいは直面しているときに、ちょうどお誂えむきに現われるのが援助者なのである。マックス・リュティによれば、「民話においては、善は同時に美しく且つ成功し、悪は同時に醜く且つ成功しない、という通俗的な観念は無条件では通用しない。そのようになることは確かに往々にしてみられるけれど、必然的なことではない。民話はそのような現実的な願望観念とは結びついていない」、「次々にできてくるパンやチーズ、いくら使っても終りにならない糸玉、人間が手に入れる宝物や労働の援助者とかいうものを物語るのは伝説であって民話ではない。職人や主婦の仕事を一夜のうちに片付けてくれる小人、アルプスの牧草地で牧人たちの相手になる森の精、かまど、家畜小屋、畑などに幸福と祝福をもたらす家の精、それらはもちろん素朴な人々の大きな憧れから生まれたものである。毎日々々艱難辛苦に耐えて働いてやっと手に入れることのできるものを、伝説を生みだす民衆は彼岸の人物から贈ってもらうのである。しかしながら民話は日常の欲求が充足されることを夢みることはない。民話は主人公を大きな課題に直面させ、遠くにある危険に向かわせるし、民話の興味は本来、最後に主人公のものになる宝物とか王国、妻などにあるのではなくて、冒険それ自体にある」のだが、他方において「このように広汎に分布した文芸の形態を規定しているのは二つの点であって、先ずそれは民話の創始者と育成者の性質によって規定されている、と同時に、この方がはるかに本質的なのだが、聞き手の要望によっても規定されている」ことも事実であり、Volksmärchen が主として家庭で子供たちに語られる物語であること、そこには当然主人公の成功に託した恵まれない庶民の夢があることも考えると、《援助者》は《主人公の成功》と密接なつながりをもっていなければならない。主人公と脇役のちがいが最も大きいのがこの点で、《援助者》が助けるのは主人公だけである。脇役たちが援助者たらんとするものたち

を自ら拒絶して、次々と失敗を重ね牢に入れられたり首を刎ねられたりするのに対して、主人公は的確に対応して、その助力で不可能と思われていた課題をいとも簡単にやりとげてしまい、王様になったりお妃になってしまうのである。グリム兄弟の „Kinder- und Hausmärchen“ に収められた 206 の民話（番号は 200 になっているが、38 番に二つ、39 番に三つ、105 番に三つ、151 番に二つとそれぞれ複数の話があるので実数は 206 になる）に限定して、《援助者》について論じ、そこにこめられた民衆の思いを明らかにしてみたいと思う。

先ず民話に登場する援助者の一般的な性質について、マックス・リュティが述べていることを列挙してみると、「彼岸的な援助者は此岸の人間と生活を共にする仲間でもないし仕事仲間でもなく、話の筋が援助を必要とするときに何も無いところから突然現われるのである。殆どのばあい、場面が新しくなると新たな援助者が現われる。しかし、同じ援助者が何度か現われるばあいでも、援助と援助のあいだは消えていて姿をみせない」、「主人公が援助者を呼び出すのは自分の精神力によるのでもないし、意志の努力によるのでもない。彼は自分と援助者とを結んでいる贈物のつまみをひねるだけで、何の苦もなく援助者を呼び出すのである」、「援助者たちは、彼らが必要とされる瞬間に現われる。たいていは彼らは個々別々の存在である。非常に正確且つ確実に、物語が進んでいくうちに生じてくる課題を解決して、そのあとはまた消えていく」、「主人公は、当面する課題を解決するのに必要なことがらを知っているか、あるいは自らその課題を解決できる援助者にいつもまいぐあいにでくわす」、「主人公が魔法の馬や失踪した兄弟を探しに行くばあいには、彼がちょうど必要としている忠告をしてくれる老婆かあるいは隠者に途中ででくわす。そのばあいこれらの忠告者は決して全知全能ではないが、話の筋の当該箇所彼らが知っておく必要のあること、それを彼らは必ず知っている。主人公がいくつかの課題を解決しなければならないときには、民話は主人公にそれぞれの課題に対して専用の援助者、あるいは専用の魔法の品を与えることがよくある」、「しかもまた彼岸的な援助者については、主人公が必要とすることをなぜ彼らがいつもきちんとしてやれたり、あるいはそれをぴたりと知っていたりするののかについてなんの説明もない。援助者はどんな体系にも組み入れられるということはないし、彼らの力は、例えば神とか悪魔といったより高次元の存在からひきだされるのではない。援助者は孤立したまま現われ、孤立したまま行動し、その存在の根拠と様相が我々に明かされることはない。彼らはたいていのばあい単独で現われ、ただ一つだけ任務をもっている。即ち、主人公を助け続けるか、あるいは彼に厄介事をいくつか背負わせるのである。そのあとで

は援助者は無の中へもどっていってしまう」,「援助してくれる動物は、主人公が示した重大であったりあるいは取るに足らない尽力への感謝の念からたいていのばあいは援助するのである。しかし、なんら明白な理由などないのにわりこんでくことさえある。援助者は贈物と同様、課題を解決しおえるとすぐに、一言の説明もなく視界から消えていくことがある。あるいはその援助者が最後に主人公によって救われることもあるし、民話はその正体と運命について我々に暗示していることもある」,「解決不可能にみえる課題はたいてい、魔法に通じた援助者によって克服される」などである。これらの性質をまとめてみると、《援助者》のおおよその輪郭、イメージはうかんでくると思う。援助というより恵みを与える神、必ず交換条件を出す悪魔などは、その性質を考えて予め援助者から除外すると、次のような《援助者》像がえられる。即ち、彼岸的な孤立した人物（小人、一寸ぼうし、神通力をもった老婆、魔法で動物に変身させられた王子、王女として登場する）、又は主人公に何らかの恩、好意を感じている動物で、課題をもった主人公が必要とする瞬間に現われ、主人公の課題を自ら解決してやるかあるいはその解き方を知っていて教えてやり、ばあいによっては解決のために必要な贈物をし、援助者としての役割を終えるとまた消えていくのである。

„Kinder- und Hausmärchen“ に収められた 206 の民話の中には、主人公が何らかのかたちで誰かの援助をうける話が 69 ある。主人公が生死を賭けるような難題を与えられ、放浪の旅に出たところで突然現われる小人や神通力をもった老婆、先に命を助けてもらって後になって恩返しをする動物など、《民話における援助者》とよぶに相応しいものが登場するのが 34 話、信心深い粉ひきの娘に恵みの手を差しのべる天使や神さま、いずれはその魂を奪うつもりで、退役になって困窮している兵隊にとりあえず力のかす悪魔をはじめ、貧しい靴屋夫婦をお金持にしてやるが、自分たちの服や靴を手に入れるとそれっきり消えてしまう裸体の小人、魔法をかけられて小魚と子羊になった兄妹を元どりの人間にかえしてやる神通力をもった女、主のお百姓に捨てられた老馬を主の元へ帰れるようにしてやる狐、墓の番をして隣人の魂をまもっている男を助けて悪魔を追い払う退役した兵隊など、主人公が何らかの課題をおびていて、その課題を解決するのに援助を必要としているのではなかったり、彼岸的な孤立した人物などではなくて、それゆえ《援助者》とはいえないものが登場するのが 35 話である。ここでは、主人公を援助はするのだが、《民話における援助者》とはいえない性質の援助者について、主人公と援助をするものとの関係、その内容などを検討し、なぜ《援助者》といえないのか、個々の話を例にしてその理由を明らかにしておこうと思う。

35 の物語を主人公の課題と主人公に対する援助という点から整理してみると、3. Marienkind, 16. Die drei Schlangenblätter, 19. Von dem Fischer un syner Fru, 24. Frau Holle, 31. Das Mädchen ohne Hände, 39. Die Wichtelmänner: Erstes Märchen, Zweites Märchen, 40. Der Räuberbräutigam, 42. Der Herr Gevatter, 44. Der Gevatter Tod, 53. Sneewittchen, 81. Bruder Lustig, 82. De Spielhansl, 85. Die Goldkinder, 87. Der Arme und der Reiche, 99. Der Geist im Glas, 100. Des Teufels rußiger Bruder, 101. Der Bärenhäuter, 103. Der süße Brei, 110. Der Jude im Dorn, 116. Das blaue Licht, 120. Die drei Handwerksburschen, 125. Der Teufel und seine Großmutter, 132. Der Fuchs und das Pferd, 135. Die weiße und die schwarze Braut, 182. Die Geschenke des kleinen Volkes の 26 の話では、確かに主人公を援助する登場人物がいるが、援助をうける主人公は何らの課題ももっていないのである。それに対して、6. Der treue Johannes, 25. Die sieben Raben, 55. Rumpelstilzchen, 92. Der König vom goldenen Berg, 93. Die Rabe, 121. Der Königssohn, der sich vor nichts fürchtet, 123. Die Alte im Wald, 195. Der Grabhügel, 197. Die Kristallkugel の 9 話では、主人公は何らかの解決すべき課題をかかえているし、その主人公を援助する登場人物もいるのだが、主人公の課題解決と主人公に対する援助とが直接つながらないのである。この 9 話について先ず検討してみると、6. Der treue Johannes (忠臣ヨハネス) では、主人公忠臣ヨハネスが解決すべき課題は彼が誰かから与えられたわけではなく、彼が救う王子も自分の運命については何も知らない。三羽の鴉が予言的に話すことが忠臣ヨハネスの課題となるのであり、その解決にあたっては鴉たちも忠臣ヨハネスを助けることはできないのである。それどころか鴉たちは忠臣ヨハネスが課題を解決することになることすら知らないのである。「黄金<sup>こがね</sup>の屋根の国の王女」(die Königstochter vom goldenen Dache) の身も心も手にいれたと思って帰路を急ぐ王子の一行に、「やあ、やっこさん、黄金<sup>こがね</sup>の屋根の国の王女を郷国<sup>くに</sup>へつれてきな」、「そうだ。だがね、まだ手にははいらぬさ」と行手にある障害について三羽の鴉がしゃべっているのを、独り忠臣ヨハネスだけが聞く。その内容は「二人が上陸すると、王さまのとこへ、栗毛の馬がはねてくる。王さまは、そいつへひらりととび乗ろうとする。もし乗ろうもんなら、馬は王さまをのつけたまま、いちもくさんにかげだして、ふうっと、影も形もなくなっちゃうんだから、王さまは、せっかく手にいれたむすめに、二度とふたたびあえないのさ」、「だれか別の男が、すばやくとびのって、鞍にくっついていてる皮ぶくろからピストルをだして、その馬をうち殺せば、わかい王さまはすくわれる。だが、そんなこと、だれも知りゃ

しないし、もし知ってて、それを王さまに言うものがありゃ、そいつは、足のつまさきから膝っこまで石になっちゃう、「馬がころされたって、わかい王さまは、花よめさんをつかまえとくわけにはいかないよ。ふたりがそろってお城へはいると、花むこさまのしたてあがりの下着が大皿にのってでている、こいつ、まるで金糸きんしと銀糸ぎんしで織ってあるようにみえるけれど、実は、硫黄とちゃんちやんで、そいつを王さまが着ようもんなら、下着は、王さまを骨の髄まで焼いちゃうんだぜ」、「だれか、手ぶくろでその下着をつかんで、火のなかへほうりこんで燃やしちまえば、わかい王さまの命は助かる。だけど、そんなこと、なんにもなりゃしない、このことを知っていて、王さまに告げぐちするものがありゃ、そいつは、からだ半分、ひざっこから胸まで石になっちゃうからな」、「いくら下着がもされたって、わかい王さまは、まだまだそんなこって花よめさまを手にいれたとはいかないよ。御婚礼がすんでから、舞踊がはじまって、わかいおきさきがおどりだすと、おきさきは、にわかになっさおになって、まるで死んだようにぶったおれる。そのとき、だれか、おきさきを抱きおこして、おきさきの右の乳房から血を三滴すいだして、それをまた吐きだしちまわなければ、おきさきは死んじまう。しかし、このことを知ってるものいっつけぐちがいて、密告みつげぐちでもしようもんなら、そいつは、あたまのてっぺんつげの旋毛つげから足のつまさきまで、からだじゅう、石になっちゃうのさ」というものだが、忠臣ヨハネスがそれをすべて自分ひとりでやって、罰として死刑になるときに、「臨終に、おなごりの話」としてそのわけを話して石になってしまうのを、鴉たちは防ぐことも助けることもできないのである。王子と王女が結ばれるための課題とその解決のしかたは、鴉たちがしゃべったことで忠臣ヨハネスが知るところとなる。しかし、鴉たちは「ヨハネスにはからすのことばがよくわかった」ことを知らないで、一方的にしゃべるのであって、忠臣ヨハネスが自らその課題をにない、また実際にそれを解決してしまうだろうとは思ってもいないのである。元々忠臣ヨハネスがこのような課題を誰かから与えられて、その解決のしかたを鴉たちが主人公たる忠臣ヨハネスに伝える、という形が民話における援助であろうと思う。25. Die sieben Raben (七羽のからす) では、自分のせいでは七人の兄がからすになってしまったことを知った娘が、「兄さんたちをどこかしらでさがしだしたうえ、たとえじぶんはどんな目にあっても、なんとかして兄さんたちを呪いから解きはなつ」目的で人知れず旅立って、世界の果てまで歩いて行って最後に星のところに行く。暁の明星が、娘にひよっこの肢を一本わたして、「この肢をもっていないと、ガラス山があげられない。ガラス山のなかには、おまえの兄さんたちがいるのだからね」と教えてやる。これは援助であろうが、ガラス山

にたどりついたとき娘は肢をなくしてしまっていて、「ちいさい妹は、健気にも小刀をとりでして、じぶんのかわいらしい小指を一本、ぶつりと切りおとすと、それを門のかぎ穴へさしこんで、うまいぐあいに扉をあげました」ということになるし、兄さんたちを呪いから解きはなつという課題も、「そのうちに、七番めのからすが盃を飲みほしたとたんに、小さな指輪がころげだしてきました。よくみると、それは見おぼえのあるおとうさんとおかあさんの指輪だったので、『ほくたちの妹が来ているんだと、いいなあ。そうすりゃ、みんな、救いだされるんだがなあ』と、口へだしました。扉のうしろで立ちぎきしていた娘は、このねがいごとが耳へはいるとその場へ出てきました。すると、そのとたんに、からすたちは、一羽のこらず人間の姿をとりかえました」であっさり解決してしまう。暁の明星は兄さんたちの居場所は教えるが、そのガラス山への道は教えない。娘は、「どこまでもどこまでも歩いて行くうちに、やっとのことで、ガラス山へたどりつきました」のである。暁の明星が娘にわたしたひよこの肢は結局贈物としては使われないし、娘が兄さんたちに会いさえすれば呪いが解ける、ということを知っていたわけではない。ここでも主人公の課題解決と援助との間につながりがなくなっているのである。55. Rumpelstilzchen (がたがたの竹馬こぞう) では、父親がついた「わたくしは娘を一人もっておりませんが、これの取柄は、藁をつむいで黄金にいたすことでございます」という嘘から、「さあ、仕事にとりかかれ。今夜からかけて明日の朝までに、これだけの藁をつむいで黄金にしておかなければ、おまえは死ぬのだぞ」と王さまに命じられて、貧乏な粉ひきの美しい娘が途方にくれているところへ、一寸ぼうしが現われて娘のかわりに藁をつむいで黄金にしてやり、娘は王さまと結婚するのである。ところがこの一寸ぼうしは娘に「おまえ、おいらに何をくれる？ おいらがおまえのかわりに黄金を紡いでやったらさ」と代償を要求し、娘が「あげられるものなんか、あたし、もうなんにもないわよ」と返事をした三度目には、「ではね、おまえが王さまのおきさきさまになったら、おまえのいちばんはじめの子どもをくれると約束おしよ」というのである。一度目は「あたしの頸かざり」、二度目は「あたしのゆびわ」と邪気のないもので満足していた一寸ぼうしが、娘がもう何もたなくなった三度目にする要求は、まさに悪魔的な要求である。このような交換条件をだす一寸ぼうしは、娘が王さまと結婚するところまでは確かに援助者の様相を呈しているが、《民話における援助者》ではありえない。92. Der König vom goldenen Berg (黄金の山の王さま) では、せっかく魔法にかけられていた王女を救い、結婚して「黄金の山」の王さまになったのに、父親の住んでいる町に帰ったときにうっかり王

女との約束を破ってしまい、王女に捨てられてしまった主人公が、自分の王国へ帰る旅の途中で、三人の大入道が「人が手にとって、『あたまや、みんな落ちろ、おいらのだけは別ものだ』、と言うと、そこにいる人の首は一つ残らず落ちてしまう」という一振の剣、「それを身に着けたものは姿が見えなくなる」というつりがねマント、「これをはいて、どこそこへ行きたいとおねがいますと、目ばたきするまにそこへ行ってしまう」という一足の靴の所有をめぐる争っているのにでくわす。その三つとも手にいれて自分の王国に帰った主人公は、最後には王妃も含めて逆らおうとした皆の首をおとし、一人天下、黄金の山の王さまでありましたというのだが、大入道たちは「おとつあんののこした財産をどういふふうに分けたらいいか見当がつかない」で喧嘩をしていたのであって、「ちいっばけな人間なんてものは、とかうまい智慧があるものだ、おまえ、この遺産をおれたちに分けてくれ」と頼みはしたが、主人公にわたすつもりは全然なかったのだし、主人公も横取りするつもりなど毛頭なかった。三つの品物が本当に魔法の品かどうかを試そうとただけであり、三つ目の靴をはいたときに「およめさんと子どものほかは何もかんがえず、『こがねの山の上へ行けたら、よかろうなあ』と、ひとりごとを言いました」ら、そのとおりになったというのである。これらの品物がなければ主人公は自分の王国に帰ることも、再び黄金の山の王さまになることもできなかったのであるから、これらの品物が主人公を援助する贈物になっていることは確かだが、その所有者であった大入道たちは決して援助者として登場して主人公に贈物をしていないのである。93. Die Rabe (おおがらす) では、争っているのが強盗三人で、「その杖で扉をたたくと、扉は、さっと開く」という一本の杖、「これをはおると、その姿が見えなくなる」という合羽、「それに乗ると、どこへでも行ける、このガラスの山でも登れる」という馬を、「この三つをひとまとめにして三人でもっているのがいいか、それとも別々にわけておくほうがいいのか、わからないでこまっている」というのであるが、主人公は「その三品は、わたしが、ほかの物ととりかえっこすることにしよう。わたしは、銭こそもっていないが、ほかのもので、もっと値うちのあるやつをいくつか持ってる。だが、そのまえに、きみたちの言ったことがほんとうかどうか、ためしてみなきゃならないぜ」といって横取りし、最後には魔法をかけられて鴉になっていた王女を救うのである。92 番の話と同工異曲である。121. Der Königssohn, der sich vor nichts fürchtet (こわいものなしの王子) では、旅に出た王子が大入道に頼まれて「生命の木の実」をとりにいく。その木の実を守っていたライオンが王子の家来になって、その後王子が何度も大入道に殺されそうになるのを救う。なおも世



界を遍歴しているうちに魔法のかかっているお城にやってきて、お姫さまを魔法の呪いから救ってやることになる。「三晩つづけて、この呪われている城の大広間においでいただかなくてはなりません、それも、露ほどもこわいとおぼしめしてはなりません。子どもが、それはそれは手ひどくあなたを責めさいなむでございましょうが、うんともすんともおっしゃらずにごしんぼうあそばせば、わたくしは救いだされるのでございます」というのが、主人公たる王子が与えられた課題なのだが、ライオンはここでは何らの援助もしない。ライオンの役目は王子が大入道から殺されないように守るだけで、その結果生じた主人公の本来の課題とは全くつながりをもっていないのである。123. Die Alte im Wald (森のなかのばあさん) では、森で強盗に襲われてたったひとり助かった下婢が、白い小鳩に助けられて食物、寝床、着物をもらい、かわりに白い小鳩のために使いをしてやるのだが、白い小鳩が求める「なんにも飾りのない」指輪は、白い小鳩が指示したままには見付からず、下婢が気転を利かせて手に入れ、その結果魔法がとけて白い小鳩は王子にもどり、下婢はそのお嫁さんになる。本来援助者である白い小鳩が、主人公である下婢に課題を与え、最後には自らが救われるという形式だが、最初に援助者として登場したはずの白い小鳩は、主人公が課題を解決する場面では何らの援助もしないのである。白い小鳩はやはり《援助者》とはいえない。195. Der Grabhügel (どまんじゅう) では、お金持の百姓がライ麦を借りにきた隣の貧乏人に、「わしが死んだらね、おまえさん、わしの墓に、三晩だけ見はり番をしておくれ」という条件で倍の量のライ麦をめぐんであげる。約束の時がやってきて貧乏人は墓の番に行き、二晩だけは何もなく過ぎるが、三晩目には悪魔がでてきて「この墓のなかにころがってるやつあ、おれさまのもんだ、おれさまが、きゃつをひつつあらってくだ、てめえたち、そこを退か<sup>と</sup>にゃ、そっ首ひんねじるぞ」という。たまたま宿がなくて墓地にきていてその晩だけ一緒に墓の晩をしていた「正真正銘御用相済みの兵隊さん」が、悪魔の鼻をあかしてなんとか夜をきりぬけ、百姓の魂を救い、悪魔から奪ったお金で以後貧乏人と仲よく暮らすのである。主人公を援助したのは彼岸的な人物ではなく、援助がすんだあとも消えていくわけではないし、もしも貧乏人が約束を果たしえなかったら彼はいったいどうなっていたのか、兵隊さんの援助と貧乏人が解決すべきであった課題とのつながりぐあいにも不明なところがあり、兵隊さんはやはり《民話における援助者》とはいえないと思う。197. Die Kristallkugel (水晶の珠) では、魔法をつかう母に兄二人を驚と鯨に変身させられて、類が自分に及ぶのを恐れて逃げだした三男が、「金陽城」(das Schloß von der goldenen Sonne) で救助を待っている魔

法にかけられた王女を助けにでかけるが、その城がどうしても見付からない。途中迷いこんだ森で「ふるほけた帽子」をめぐって喧嘩している二人の大入道にであうが、実はそれが「願かけのかなう魔法のぼうし」だったので、主人公はめでたく「金陽城」につき、王女を救いだして二人は結ばれることになる。三男が王女を救うための課題を解決するにあたっては、驚と鯨になっている二人の兄が助力するが、三人が予めであっていたわけではないので、その意味で二人の兄には援助者としての性質はないといわなければならない。主人公を「金陽城」に導く「願かけのかなう魔法のぼうし」が、主人公の課題解決につながっていて《援助者からの贈物》のようにみえるが、この帽子は援助者が贈ったものではない。二人の大入道がそれぞれ自分のものにしようとして争っていたこと、主人公自身に横取りの意図がなかったことは、92 番の話と全く同じである、「『そのぼうし、ちょっと貸してごらん』と、若者が言いました、『あたしがね、ちっとばかりあっちへ行く、それからおまえたちを呼ぶから、ふたりで駈けっこをするんだ、あたしのとこへ先に来た者が、こいつを自分のものにするというわけだよ』。三男は帽子をかぶって歩きだしましたが、王女のことばかり考えて、大入道たちのことは忘れてしまい、ずんずん歩いて行ってしまいました。ところが、途中でつくづく溜めいきをついて、『やれやれ！ なんとかして、金陽城へ行きたいもんだなあ』と、口ばしりました。すると、その言葉が、くちびるへ出たか出ないうちに、もう、どこかの高い山の上の、お城の御門の前に立っていました」。

次に 35 の物語を、援助をするもので分類してみると、神さま、聖母マリア、聖ペートルスなど信仰にかかわる天上の存在が登場するものが、3 番、31 番、81 番、82 番、87 番、135 番の 6 話、悪魔、死神といった地下の存在がかかわるものが、42 番、44 番、100 番、101 番、120 番の 5 話、小人、一寸ぼうしがかかわるものが、39 番の 1、39 番の 2、53 番、55 番、110 番、182 番の 6 話、老女又は神通力をもつ女が登場するものが、24 番、40 番、103 番、125 番の 4 話、いろいろな動物が関係するものが、6 番、19 番、85 番、121 番、123 番、132 番（ただし、123 番の白い小鳩はすでに見てきたように、王子が魔法で変身させられている）の 6 話、最後に分類不可能なものが登場するのが、16 番、25 番、92 番、93 番、99 番、116 番、195 番、197 番の八つの話である。先に触れなかった、いずれも主人公が何ら課題をもたない 26 話のうちのいくつかをとりあげて、援助の実態について言及してみようと思う。援助そのものが、どんな時にどんな形で行なわれるかを知ることはそれ自体面白いと思うし、また《援助者》を論じるときに参考になるとも思うからである。神さまが登場する話で、135. Die weiße und

die schwarze Braut (白い嫁ごと黒よめご) は、「みるかげもない貧しい男のすがたで」登場した神さまに、母親と実の娘は冷たく応じ「このふたりは夜のように黒く、禍罪のように醜くなれ」と呪われ、優しく親切に応じたままっ子の娘は三つの望みをかなえてもらうことになる、「あたしね、お日さまのように美しくきよくなりたいわ」、「そのつぎはね、いくらつかってもおあし銭のなくならないお財布がほしいの」、「それから三番めにはね、あたしが死んだら、天国へ行かれますように」。最初に望んだ《美しさ》が彼女を王さまのお妃にするのだが、二番目、三番目の望みについてはどうなったのか全然描写がない。横柄で冷たい行為には厳しい罰で応じ、優しさ、親切さには恵みで応える神のすがたを描いた物語といえよう。81.Bruder Lustig (のんきぼうず) は、乞食すがたの聖ペートルスに自分のもっていたものの大半を与えてしまい、一緒に旅することになった主人公が、助けてくれる聖ペートルスに嘘をついたり、あるいはごまかしたりしながら、それでも最後には「だが、おまえが、きき将来へ行つて、また通つてはいけな道のあるくとこまるから、そんなことのないようにな、わしが、おまえのはいのうに、おまえがそのなかへ入れたいと思うものはなんでも中へはいる神通力をさずけてやる。たっしゃでおいで！ こんどこそ、もうこれぎりあわないよ」と不思議な力をさずけてもらい、なおしばらくは楽しく浮世をあるきまわる。ところがいよいよこの世を去ることになると、地獄でも天国でもどうしても中へ入れてくれない。そこで「では、しょうがねえ、おいらを入れてくれねえんなら、きさまのはいのうだけでも受けとってくれ、そうすりゃ、なに一つきさまのせわにゃならねえや」、「こんどは、あたくしのからだだが、あたくしのはいのうのなかへはいりますように！」と、聖ペートルスを誑かしてちゃっかり天国にはいりこんでしまう話である。主人公がどうして聖ペートルスに力添えを繰り返してもらえないのかわからないのだが、聖ペートルスがかかわる話はこんな形式のようである。教会の腐敗、優雅な生活をしている聖職者に対する民衆の揶揄の気持がこめられているのであろうか、あるいは呑気もの、道楽ものの民衆の素朴な夢だったのであろうか。案外こんな民衆の方が敬虔な信者よりも多かったことを示しているのかもしれない。100.Des Teufels rußiger Bruder (悪魔のすすだらけな兄弟ぶん) では、「おまえ、おれにやとわれて下男になる気があれば、一生涯楽にしてやるぜ。奉公は七年だけで、あとはまたおまえのすき自由になる。だが、言いきかせておくことが一つある。おまえは、からだを洗つてはいけない。髪かつの毛に櫛を入れてはいけない、指で(ふけを)はじいてもいけない、爪もあたまの毛もきつてはいけない、目からでる水気みづけのものをふいてはいけないのだぞ」といわれて悪魔の下男になっ

た主人公である「満期おいとまになった兵隊さん」が、約束の仕事を七年間やりとおすのだが、その間に「まかりまちがって、お釜の中をただ一ぺんでものぞこうもんなら、とんでもない目にあわされるぞ」と固く禁じられていた釜の中を一つ、二つ、三つとのぞく。しかしその中にいたのが以前自分の上にいた下士官、見習士官、大将閣下だったので、「なあるほど！ ばかな面な！ こんなところで、にしにあおうた思わなんだ、むかしや、にしがおれを顔かほで使いおった、今じゃ、にしを煮て食おうと焼いて食おうと、おれのかってじゃ」と火をかきたて、新しい薪をくべ、地獄の業火をあおりたてる。その処置が悪魔の意になつていたということでおとがめなしに給金の黄金をもらい、悪魔から放免され、ついにはお姫さまと結婚して、王さまが亡くなったあとでは自ら王さまになるのである。契約に反することをすれば魂を奪われ悪魔のものになるが、うまくやりとおせば悪魔の手を放れ幸運をつかむというのが悪魔が登場する物語の基本形式で、ここでは悪魔が結果的には援助者の役割を演じていることになる。101. Der Bärenhäuter (熊の皮をきた男) も同工異曲といえる。110. Der Jude im Dorn (いばらのなかのユダヤ人) では、百姓の下男をしていた主人公が、三年間の給金としてもらったわずか三ヘレルの金をもって旅にでる。途中でであった一寸ぼうしに「まあ、きいてくれ、わしは一文なしの素寒貧だ、わしに、おまえの三ヘレルをくれよ。わしあ、もう働いて銭をとることあできない。そこへいくと、おまえは若い、自分のパンをかせぐのあ、わけなしだろ」といわれ、「ええいっ！ くれてやれ、おら、こまりゃしねえや」とやってしまう。その行為に報いて「こびと」が三つの願いをきいてやる。主人公は「第一番にや、おらのねらうものならなんでも当たる吹き矢だ、二番めは胡弓がいい、おらがそいつをひっこするてえと、その音いろをきくものは、なんでもかんでも踊りださずにゃいられねえやつだね、それから三つめは、おらに何かたのまれたものは、だれでもはねつけるわけにいかねえことにしてくれや」といって願いをかなえてもらい旅を続ける。長い山羊ひげをはやしたユダヤ人をいばらの中で踊らせてひどい目にあわせ、訴えられて縛り首になるところを、「死ぬめえに、おねげえを一つかなえてくたせえ……この世での弾きおさめに、もう一度、胡弓をひかせておもれえ申してえでがす」と願って許され、裁判官をはじめ皆を踊らせる。結局自分は助かり盗みをしていたというユダヤ人が首をくられるわけだが、元々かなえられた三つの願いが原因で危い目にあい、また助かるというだけのことで、かなえられた三つの願いが主人公の幸運をよぶわけでもないし、主人公がその後どうなったかということについても何も語られていない。一寸ぼうしはやはり《援助者》とはいえない。182. Die

Geschenke des kleinen Volkes (こびとのおつかいもの) は、連れだって修業の旅にでた仕立やさんと<sup>かざり</sup>飭やさんが、月明りの中を丘陵で輪になって踊っている小人たちにてあう。「からだもほかのものたちよりいくらか大きく、五色の上衣を着て、氷のような色のひげが胸にたれさがっている」爺さんが、二人をおどりの輪の中に招きいれると、二人の頭の毛とひげをつるつるに剃りおとし、わきのほうに積みあげてある石炭をもって帰らせる。二人が朝起きてみると石炭は純金にかわっていて、頭の毛もひげも元どおりになっている。仕立やさんは「わしは、ほしいだけもっている、これでたくさんだ、これから親方になって、好きなやつを嫁にもらって納まるよ」というが、欲ばりな飭やさんは、もう一度でかけていってもっとお金持になろうと、日が暮れると「うんと詰めこめるように、<sup>がつさい</sup>合切ぶくろを三つ四つ肩にひっかけて」でかけていき、ほくほく顔で帰ってくる。しかし翌朝起きてみるとかくしゃふくろからでてくるものは石炭ばかりのうえ、前日の黄金も石炭になっていて、ひげも頭もつるつるにはげ、おまけに元々背中にしよっていたと同じ大きさの駱駝のこぶがもう一つ胸にもくつついている。主人公が何かをしようとしているのを援助しているのではなく、欲ばりとそうでない者とが対照的な結果をえるという物語である。小人、一寸ぼうしは、元来示された好意に報いるという形で主人公を援助するというのが一般的なようだが、心がけをよくしていると直接援助するというのもままあって、39. Die Wichtelmänner (まほうをつかう一寸法師) の Erstes Märchen と Zweites Märchen などがそうだが、主人公がその援助をうけて何かをするということではなく、援助そのもので幸せになるという形式のようである。ただ、116. Das blaue Licht (青いあかり) にでてくる「ちいさな、まっ黒なこびと」は、主人公が魔女のものを横取りしたランプの精で、援助者というよりも持主の家来となってその命令どおりに行動するというもので、小人、一寸ぼうしとしては例外的な性質をもっているので、援助するものとしては《分類不可能》のところにいれたのである。24. Frau Holle (ホレのおばさん) は、まま子で母親にいじめられているが美しく働きの娘が、井戸のなかにおとした糸まきをとりに行く。途中パンがまの前をとおって「こまっちゃった！ あたしをひっぱりだしてえ！ あたしをひっぱりだしてえ！ だしてくれないと、やけ死んじまう。もう、とっくのむかしにやけてるんだよう」とよびかけられると、一つ残らずパンを掻きだしてやり、鈴なりのりんごの木が「こまっちゃった！ ほくをゆすぶってえ！ ほくをゆすぶってえ！ もう、みんな熟しきってるんだよう」と頼むと、実が木に一つもなくなるまで木をゆさゆさゆすぶってやる。ホレのおばさんの家に着くと、いいつけられたとおり、なんでも

気にいられるように働くので、ホレのおばさんはご褒美に娘を頭のとっぺんから足のさきまで黄金でおおったうえで、糸まきも返してやる。きりょうも悪く怠けものの娘も同じく井戸にとびこんでいくが、パンがまのところでは「すきこのんで、じぶんのからだをよごす者があるとでも思うの?」と返事をしてさっさといってしまうし、りんごの木のところでは「ずいぶんむしがいいのねえ。あたしのあたまの上へでも落ちたら、どうして?」といいすてていってしまう。ホレのおばさんのところでも、最初の日こそ精を出して働くが二日目からはてんで働かず、奉公をことわれ、からだじゅう一面にまっ黒などろどろしたチャンをもらって帰ることになる。優しさ、親切さ、勤勉には良いこととしてそれに報い、それがないとみせしめの罰を与えるという教訓を含んだ話であろう。125. Der Teufel und seine Großmutter (悪魔と悪魔のおばあさん) では、脱走を企てながら麦畑の中で身動きがとれなくなった三人の兵隊のところ、「火の竜が一頭」やってきて「おまえたち、おいらに七年のあいだ奉公する気なら、だれにもふんづかまらないようにして、軍隊のいるまんなかをつれだしてやるぜ」と、三人をとりあえず助け出したうえで、「このむちをぴしりっとやるとな、いくらでも、おまえたちのほしだけの銭が目のまえにとびだす。そうなるの大旦那さまみたいな生活くらしをして、馬もちになって、馬車で往来できるというもんじゃ。だがな、七年たったら、おまえたちは、おいらのものだぞよ」、「だがな、おいらはおまえたちにだ、そのまえに、謎を一つだしてやるぞ、もし、ひょっとしておまえたちにそのなぞが解ければ、おまえたちはおかまいなし、おいらとは縁切りだよ」といって去る。お大名のような生活をしながら悪いことは何一つしないで七年間を過ごした三人が、いよいよ謎を解かなければならなくなって原っぱにすわっていると、おばあさんがやってきて「助太刀をしてもらいたければ、だれか一人、森へはいらなきゃだめだね、森へ行くと、びょうぶのような岩がくずれおちて、まるで小舎やみたいに見えるところへで、嫌でもしかたがない、そのなかへはいりこむとね、おたすけがあるのだよ」と教えてくれる。一人がそこへいくと「石みたように齢をとった婆さん、悪魔のお祖母ばあさん」がいて、火の竜(悪魔)が三人にかけようとしている謎とその答を聞きだしてくれる。その結果、三人の兵隊はそれぞれ悪魔のかける謎に正しく答えて悪魔と縁を切り、何不足なく面白おかしくくらし世を終るのである。最初にでてくるおばあさんは、謎を解くためにはどうしたらいいかを主人公に教えているし、悪魔のお祖母さんも主人公に力をかしている。その意味では、この二人は《援助者》としての資格を十分にそなえていると思うが、主人公が解決すべき課題そのものが、悪魔の手から脱れるために悪魔が出す謎を

解くという、悪魔との契約から生じたものであり、何かを成就するために主人公が誰かから与えられるという民話本来の課題からは遠くかけはなれているので、《援助者》からは除外してここで論じたのである。単純に悪魔と主人公、あるいはおばあさんと主人公とのかかわりという物語ではなく、悪魔、おばあさんと主人公とが関係した物語で、その点では《援助者》のところで論じることになる165.Der Vogel Greif（怪鳥グライフ）と似ているが、主人公の性格、課題が両者では大きく異なっているのである。最後に動物がかかわるもので、19.Von dem Fischer un syner Fru（漁夫とその妻の話）について検討してみる。漁夫があるとき大きな鱈かれいを釣る。鱈は「ま、きいてください、りょうしのおじさん、わたくしはほんとうのかれいではありません、魔法をかけられてる王子です。あなた、わたくしを殺して、なんのやくにたちますか。たべてみたって、おいしくはありませんよ。海へもどして、およがせておいてくださいな」と頼んで逃がしてもらう。家に帰った漁夫が「かれいを一尾いつびきつかまえたけど、そいつめ、魔法をかけられてる王子だというたでな、逃がしてやったよ」というと、おかみさんは「おまえさん、なんにもたのまなかつたの?」、「もう一度行って、そのおさかなを呼びだして、小さなうちが一軒ほしいってそ言ってごらん。きっと、そのとおりにしてくれるわよ」という。しぶしぶ海へでかけた漁夫が「ごぞさん、ごぞさん、たすけておくれ、かれいや、海のかれいさん、わしのにようほのイルゼビルは、わしの思よになってくれぬ」と、かれいを呼び出して妻の望みを告げ、「おかえんなさい、おかみさんのねがいは、かないましたよ」といわれて家に帰ってみると願いはかなえられている。漁夫はそれで満足しようとするが、おかみさんの方は「あたし、大きな石づくりの御殿にすまってみたいわ。かれいんとこへ行ってきてね。かれいに、ごてんをもらいましょうよ」、「ねえ、あたしたち、ここいらじゅうの王さまになれないかしら。かれいんとこへ行ってよ。王さまになれるわ」、「あたし、たいくつで、たいくつで、しょうがないのよ。もう、とてもやりきれやしない。かれいのとこへ行ってきてね。王さまでしょ、あたしは。だから、こんどは、是非とも天子さまなるのよ」、「あたし、天子さまだけどねえ、こんどは、ローマ法王になるつもりなの。かれいんとこへ行ってね」と、どんどん望みをあげてそれがすべてかなえられる。ところがおかみさんがなお満足せず、「つまらないなあ、あたしにも、お日さまやお月さまをのぼらせることはできないものかしら。ねえ、おまえさん、かれいんとこへ行ってよ。あたし、神さまみたいなものになるのよ」といって、漁夫がそれを鱈に伝えると、「おかえんなさい。おかみさんは、むかしのように、あばらやにはいってますよ」となって話が終る。

漁夫が何かをするそのための援助ではなく、命を助けてもらった蝶がそのお礼に望むことをかなえてやるという展開だが、おかみさんが度を越えて「神さまみたいなもんになりたい」と望んだときに、罰が当たって元の木阿弥になってしまう。命を助けてもらった動物が援助するのはふつう一度だけなのだが、課題をもたない主人公が次々に望みを高めていくという形式ではあれ、ここでは何度も何度も願いに応じている。珍しい例であるが、この物語にはもう一つ珍しい点がある。それは、王子だという蝶がどうなったのか、全然触れられていないことである。蝶が単なる蝶ならそれでもいいのだが、元来が王子であるというのならば、魔法がとけるにはどうしたらいいのかが、漁夫のおかみさんの望みとのかかわりで語られていいと思う。その意味では不完全な物語といえるのかもしれない。

なお引用については、マックス・リュティのものは、Lüthi, Max: Das europäische Volksmärchen, UTB 312, A. Francke Verlag Tübingen, Achte Auflage 1985 から、物語邦題と「 」でくくったものは、金田鬼一：完訳グリム童話集 1～5, 岩波書店, 1981 からひいている。